

特集

「あのとき」を振り返って ～東日本大震災から、10年～

「津波が家を襲った」「食料や水の確保に奔走した」「不安な避難生活を送った」
私たち一人ひとりに、あまりに大きな苦難となった東日本大震災から、10年。
今号では、当時市内で被災した方それぞれの「あのとき」を紹介します。
皆さんは「あのとき」をどう振り返りますか。



永井敏子さん（中央）と従業員の皆さん

皆の助け、声かけがあったから
今もこうして頑張れる

テーブルや設備
津波で全て流された

地震が発生したのは、ランチのお客様が帰った後、一息ついたときでした。

尋常ではない揺れが長く続き、棚の食器が落ち、配管が壊れる様子を目の当たりにして、被害の大きさを実感しました。

避難訓練の経験から「津波が来るかもしれない」と思い、すぐにスタツフを帰宅させてから、自分も貴重品や書類を持ってホテルを出ました。

実家の両親の安全を確保したあと河原子に戻り、避難した高台で、津波が押し寄せ近隣の家が流されていくのを見えました。



河原子海岸を襲った津波

津波の第一波のあと、高台から降りホテルに戻ると、ガラスはすべて割れ、内部はめちゃくちゃに壊れていました。その日は防寒具だけを持って親戚の家に避難しました。

地震の翌朝、ホテルに向かうと、大きく歪んだ道路の上に、防潮堤の一部や自動販売機などが散乱していました。ホテルの中には、ガラスの破片が床一面に散らばり、入ることもできない状態でした。60畳ほどの宴会場の畳は全てめくれあがり、ポイラーや厨房機器、テーブルなどの主要な設備、家族との思い出の写真なども全て流されてしまいました。



ガラスが割れ、駐車場には物が散乱

それまで、高潮などで駐車場が水に浸かったことはありましたが、ここまで大きな地震と津波が来るとは当時は全く考えていませんでした。

自分の命がどうのこうのというよりも「目の前の光景は現実のことなのだろうか」と呆然とすればかり。家が流されてしまった近所の人と抱き合って泣きました。

持ちが明るくなりましたね。また、旅館組合の方々や夫の同僚、子どもの同級生まで、本当に多くの方が、瓦礫の撤去作業などに力を貸してくれました。当時女将をしていた義母の「旅館が無くなるのは寂しい。続けてほしい」という言葉にも背中を押され、旅館を再開しようという気持ちが湧いてきました。

「廃業するしかない」 変えてくれたのは、周囲の支え

弁当屋さんの好意や友人に励まされ

初めは気落ちして、「もう廃業するしかない」と思いました。それでも目の前の瓦礫を片付けなくてはと作業していると、知り合いのお弁当屋さんが弁当を届けてくれたのです。好意が沁みて気

8月の上旬には素泊まりでホテルを再開し、9月末には厨房施設も整って食事を出せるまでになりました。

頑張る姿を見せることが恩返しになる

当時を振り返ってみると、あまりの被害の大き



「手作りの料理を安く出すのも恩返しの一つ」と笑顔の永井さん

さに周りが見えなくなり、「何が足りない」とか「こういうことで助けがほしい」とか、自分からは言い出せなくなっていました。

そのような中で、人との繋がりとどうか、周囲の方、それこそ、それまでほとんど知らなかったような方からも、協力や声かけ、情報提供があり、本当に助けられました。私たちがただだったら今頃どうなっていただろう。もし、また同じようなことが起こってしまった

とき、こうした声かけが本当に大切なことだと感じています。

この10年、防潮堤が高くなったり、風評などで海水浴客が減ったりという部分がありますが、ランチや宿泊に来てくれたお客様に、変わらずおいしい料理を提供し続けること、そして、小規模ながらもここまで頑張れましたよという姿を見せることが、当時を支えてくれた多くの方への恩返しになるのかなって。あのとき辞めていたら

きっと後悔していたと思います。

河原子一体となって市の魅力をPRしたい

日立の良いところは、何と言っても海と山、そしておいしい食べ物が揃っていること。

サーフィン客が褒められるほどの綺麗な海から、山への導線を生かした取組などを河原子の地域一体となって行って、海水浴客をはじめ、市内外に日立の魅力をPRできたらと思いますね。

ホテル永野屋女将 永井 敏子 さん PROFILE

平成12年から、創業130年のホテルの経営、フロント・調理などの全般を担当。震災後は、学生の合宿などにも力を入れてきた。



」の経験、 備えに



当時は、ピッチャーもこなす野球少年

当時、私は小学5年生。地震が来たのは下校時、通学路にある橋を渡っていたときでした。自宅に大きな被害はありませんでしたが、倒壊の心配がない車の中で2日間ほど寝泊まりし、車内のカーナビで東北地方の状況を見ていました。信じられない光景が広

がる中で見たのは、孤立してしまっただけをヘリコプターで救助する隊員や、地震によって起きた火災現場で消火活動を行う隊員の姿。この方々にも大切な人がいるはずなのに、国民・市民のために命をかけて戦っているのだと心を打たれ、「自分も誰かの役に立ちたい、役に立てる人間になりたい」と思って消防士を目指しました。

その1回の機会でも救助者を救えなければ、一生後悔する。その1回を成功させるために、何度も何度も訓練する」という言葉。現場に備える消防士の意識の高さを改めて実感しました。

市民の方にとって、火災や救急現場に居合わせたり、119番通報するという経験はめったにないことです。現場では、市民の方に少しでも安心してもらえるように接することを心がけています。

私は現在、特別救助隊として、大きな災害はもちろん、火災現場や救助現場に出場するための訓練を行っています。訓練で特に心に残っているのは、先輩隊員の「訓練の中には、消防人生の中で1回使うかわらないかの技術もある。しかし、その1回の機会でも救助者を救えなければ、一生後悔する。その1回を成功させるために、何度も何度も訓練する」という言葉。現場に備える消防士の意識の高さを改めて実感しました。

私たちが消防士の訓練と同じように、いつ起こるか分からない災害に対して、物質的な備えだけではなく、「心の備え」をしておくことが、不安や恐怖心を制御し、落ち着いた行動に繋がると、私は考えています。日本や世界で起きている災害を、他人事と捉えず「明日は我が身」と思って、備えを常にしてほしいと思います。

被災地で戦う職員の姿に憧れ消防士に

「心の備え」忘れないでほしい



日立市消防本部消防士

滝 健志さん

PROFILE

中里小学校出身。日立消防署の特別救助隊として火事や救急の現場に赴く。現在は、水難救助隊員となるべく、日々訓練を重ねている。

「1回」に備える意識の高さを実感

明日は我が身 心の備えを常に

震災後、水や非常食をストックし、祖父母の家の玄関先に非常用持出袋を置く両親の姿を見て、どこか他人事であった大きな災害が、身近なものに変わったのだと、子どもながらに強く感じたのを覚えています。

私たちが消防士の訓練と同じように、いつ起こるか分からない災害に対して、物質的な備えだけではなく、「心の備え」をしておくことが、不安や恐怖心を制御し、落ち着いた行動に繋がると、私は考えています。

防災担当者の「あのとき」

防災対策課 つかさ 後藤 司 主幹



当時は、物資調達や避難所運営の業務をしていましたが、避難した方から停電・断水、給水の状況を聞かれることが多く、当たり前前の日常生活が送れなくなることへの不安は計り知れないものなのだと痛感しました。今後、大きな災害が発生したときに、少しでも被害を減らすことできるように、そして、避難した方ができる限り不便のない避難所生活を送れるように、地域の自主防災組織と連携しながら、資機材、防災訓練の内容充実・情報発信の強化に取り組んでいきたいと考えています。

ハザードマップ



市の防災対策の「あれから」

ドローン



防災備蓄倉庫



生活に配慮した避難所

「あのとき 次の

教師や子どもたちと避難所を設営

地震が来たのはちょうど「かえりの会」のときでした。泣いている子どももいましたが、生徒たちは騒ぐことなく非常に冷静。避難訓練の経験から短時間で校庭に避難することができました。

学校と地域の繋がりが大きな力に

当時の支所の防災倉庫は毛布の備蓄が少なかったのですが、コミュニティの福祉部の方が地域を回ってかき集めてくれた200枚ほどの毛布を皆で分け合い寒さをしのぎました。また、発電機や食料、調理器具などを地域住民や企業の皆さんがすぐに届けてくれたので、夜に

でやれることは自分たちで何でもやろう」と話し合い、水の確保からテントの設営、トイレの維持に至るまで、教師や子どもたちも一緒に避難所の運営に協力しました。

は炊き出しができました。あれほどの大きな災害の直後に、地域の皆さんと迅速に動くことができたのは、黒潮太鼓や久慈中ソーランの披露を通して、学校と地域との間に繋がりができていたことが大きかったと感じています。



車や資機材が囲む中での炊き出し

「一人の犠牲者も出さない」を目標に

震災を振り返って改め

て思うことは、防災の基本は、避難経路・危険箇所を把握し、迅速に逃げられるよう反復して訓練をするということ。避難者の年齢は異なりますが、この基本は学校も地域も同じです。

地域コミュニティとしても、「どこが危険で、どこに・どのように逃げると安全だ」という情報を共有し、一時避難の場所や要援護者への安否確認など細かな点も含めた実践的な訓練をすることで、災害に備えたいと考えています。

久慈学区コミュニティ推進会長

いしかわ よしのり
石川 善憲さん

PROFILE

当時の久慈中学校長。今年度は、9月に新型コロナウイルス対策を想定した防災訓練を実施。また、当時の写真や記録書類を使い、震災の記憶を伝える活動を行っている。

震災を振り返って改めて思うことは、防災の基本は、避難経路・危険箇所を把握し、迅速に逃げられるよう反復して訓練をするということ。避難者の年齢は異なりますが、この基本は学校も地域も同じです。

号外を発行！

市の被害状況や、震災後の市の防災対策の歩み、家庭でできる地震への備えなどの詳細を、今号と同時配布した号外「東日本大震災から10年 記憶を未来に繋ぐ」に掲載しています。ぜひご覧ください。



まずはできるところから

家庭でできる災害への備え

家具の固定

- 家具を壁に固定する
- 寝室や子供部屋にはなるべく家具を置かない



水や食料などの備蓄

ライフラインが止まったときや避難生活を想定し、日頃から必要なものを揃えておく



避難経路を確認

ハザードマップなどで自宅の災害リスク、避難場所や避難経路を確認しておく

